

川本三郎

Saburo Kawamoto

ある60年代の物語



my Back Page

マイ バック ページ

マイ バック ページ

川本三郎

Saburo Kawamoto

ある60年代の物語

川本三郎

Saburo Kawamoto

1944年東京に生まれる。

「週刊朝日」、「朝日ジャーナル」の記者をへて
評論活動に入る。著書に『朝日のようにさわやかに』
『同時代を生きる「気分」』、『都市の感受性』
『忘れられた女神たち』、『微熱都市』など多数。
翻訳に『カポーティとの対話』他に
写真家稲越功一との共著『記憶都市』がある。

マイ・バック・ページ

1988年12月1日 初版印刷

1988年12月10日 初版発行

著 者／川本三郎

発行者／清水 勝

発行所／株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話：404-1201(営業)／404-8611(編集)

振替口座／(東京)0-10802

●

印刷／暁印刷株式会社

製本／大口製本印刷株式会社

●

©1988 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-309-00538-1

目次

『サン・ソレイユ』を見た日 7

69年夏 20

幸福に恵まれた女の子の死 34

死者たち 47

センス・オブ・ギルティ 54

取材拒否 67

町はときどき美しい 80

ベトナムから遠く離れて 93

現代歌情 106

逮捕まで I 119

逮捕まで II 156

逮捕そして解雇 185

art direction——坂川 栄治

photograph——オオタ・マサオ

マイ・バック・ページ

それから
わたしたち
は大きくなつた

こどもだつた
わたしたちは
みな大きく
なつた

わたしたちの
うちの一人は
留学のために
羽田をたつた
ばかりで

もう一人は
72年の年の2月の
暗い山で
道にまよつた

『サン・ソレイユ』を見た日

まったく不意打ちのように六〇年代の映像に出会った。いや応なく当時のことを思い出した。その日、一九八六年の四月、私は新橋のある試写室でフランスのインデペンデント・フィルムメーカー、クリス・マルケルの『サン・ソレイユ』（日の光もなく）という映画を見ていた。

映画は一種詩的ドキュメンタリーと呼べるものでクリス・マルケルが東京で撮影した風景が特別のストーリーもなく流れるように映っては消えていく。猫の墓参りをする老夫婦、新幹線、泪橋の労働者、フクロウの看板、テレビのなかの妖怪映画、ビルの屋上に建てられた神社、盛り場の居酒屋、電車のなかで眠りこける乗客……。

そうした日常的な風景のなかに突然、ヘルメットをかぶった学生たちがデモをしている映像があらわれた。何気ない東京の街角の風景のなかに突然入ってきた異物のようなデモの場面は私には予想もしていなかっただけに衝撃的だった。

ヘルメット、顔を隠した白いタオル、ゲバ棒。映像はシンセサイザーで処理されていて陰画のカラージュのように見えた。現実にあつたデモが幻想のなかの出来事のようにも見えた。このフィルムだけは現在のものではなく六〇年代のものに違いない。場所は三里塚だろうか。成田空港建設反対闘争。忘れかけていた、いや、忘れようとしていた過去を突然なんの脈絡もなく突きつけられた気がした。「いやだな、思い出したくないな」と私はこの場面をやり過ぎそうとした。その時、映像にかぶさるように女性の声によるナレーションが聞こえてきた。

『サン・ソレイユ』のナレーションの言葉はクリス・マルケル自身が書いている。日記のなかの言葉であつたり、友人にあてた手紙のなかの言葉であつたりする。シンセサイザーで画像処理された学生たちのデモの場面にかぶせられた言葉は次のようなものだった。

「愛するということが、もし幻想を抱かずに愛することなら、僕は、あの世代を愛したといえる。彼らのユートピアには感心しなかったが、しかし、彼らは何よりもまず叫びを、原初の叫びを上げたのだった」

「学生たちの中には、肅正の名のもとに、山中で殺しあつた者もいた。また、打倒すべき資本主

義を研究しすぎたあまり、その最良の幹部となった者もいる。他の運動と同じくここにも陰謀家もいれば出世主義者もいたのだ。しかしこの運動は、チェ・ゲバラのいうように『ただ一つの不正にも身を震わす』という人々すべてを立ち上げさせたのだ。このやさしさは、彼らの政治行為そのものよりも長い生命を持つことだろう。だから、二十歳は一番美しい季節ではない、などとは、僕は決していわせない」

『サン・ソレイユ』の学生たちのデモの場面にかぶせられたこの言葉は私の心のなかに強く残った。「僕は、あの世代を愛したといえる」「このやさしさは、彼らの政治行為そのものよりも長い生命を持つことだろう」。『サン・ソレイユ』を見ながら私はずっとこの二つの言葉をリフレインしていた。そして試写室の暗闇のなかでこの二つの言葉を手がかりに学生たちのデモがいたるところで行なわれていた。あの時代、六八年から七二年にかけての約五年間のことを思い出してみたい、考え直してみたいと思った。

長いあいだ私は「あの時代」のことを忘れようとしていた。あまりに負の出来事が多かったから思い出したくなかった。あれはみんな悪夢だったのだと思い込もうとした。

たくさんさんのデモ、内ゲバ、政治的挫折、死、そしておそらくはあの世代の誰もがどう考えたらいいかいまだにわからないままにいる連合赤軍事件。八〇年代なかばの異様に明るく、豊かな時代のなかではそうした暗い思い出はあまりに不似合で居場所がないように見えた。私自身のな

かでも「あの時代」をどうしたらいいのか手だてがなかった。忘れたふりはできても忘れることはできなかった。「あの時代」の自分と「いま」の自分が二つに完全に分裂してしまっていて、どちらが自分なのかわからなくなっていた。「いま」の自分に居直ろうとすると必ず「あの時代」の自分がそれに異議を申し立てた。「昼間はハードボイルドだが夜はそうはいかない」とはヘミングウェイの『日はまた昇る』のなかの言葉だが、私の場合も、「昼」と「夜」がしばしば分裂した。「昼」は八〇年代の東京を優雅に生きることができたとしても「夜はそうはいかない」。六〇年代の暗いシーンが断片的に、突発的に思い出されてしまう。

「あの時代」のことは忘れたいという気持と、負の出来事ばかりだったとしてもあの時に信じようとした理念、いや、理念以上の理念を信じようとした想いだけはいまこの瞬間でも肯定したいという気持が錯綜していた。そして時代が明るくなればなるほど（しかし本当に明るいのだろうか）「あの時代」を自分のなかで救い出したいという気持が強くなった。だが救い出すといってもどんな手だてがあるのだろうか。

『サン・ソレイユ』のなかのクリス・マルケルの言葉が急に私にとって重要なものに思えてきた。「愛するということが、もし幻想を抱かずに愛することなら、僕はあの世代を愛したといえる」。私もまたこのことを率直に認めてそこから出発しよう。私もまた「あの世代を愛した」のだ。おそらくはその「やさしさ」ゆえに。再びクリス・マルケルの言葉を借りるなら「しかし

この運動はチェ・ゲバラのいうように『ただ一つの不正にも身をふるわす』という人々すべてを立ち上がらせたのだ。このやさしさは彼らの政治行為そのものよりも長い生命を持つことだろう。『ただ一つの不正に身をふるわす』という「やさしさ」、それは言葉を換れば、「正しさ」を求める想い、あるいは、自分を社会的存在、歴史的存在としてとらえたいという想い、である。フランスのサルトルが提起した、いまならナンセンスといわれてしまうだろう「飢えた子どもを前にして文学は可能か」という問いがあの時代に私たちの世代に衝撃を与えたのは私たちが自分をひとりの個としてよりも、社会的存在、歴史的存在としてとらえたいという気持を強く持っていたからではないだろうか。といってもそれは決して「私」という個人的な部分を歴史性や社会性のなかにゆだねていくことではなかった。むしろ歴史性や社会性に対峙するくらいに「私」にこだわるということだった。全共闘という組織が既成の政党や政治から自立して、自分たちの固有の言葉“を持とうとしたように、私たち個人も歴史性や社会性から自立して、自分たちの固有の言葉“を持とうとした。

時代そのものは少しもやさしくなかった。ベトナム戦争という小さな国での大きな戦争があった。新聞でもテレビでもベトナム戦争のニュースがない日はなかった。僧侶の焼身自殺、ゲリラの公開処刑、ナパーム弾におびえて逃げる少女、雨が降りしきる泥沼の戦場で土嚢を枕に眠る疲れ切った黒人兵。そうしたいくつもの悲劇の写真は、あの時代“のアイコン”といっていいものだ。

時代は少しもやさしくなかった。クリーデンス・クリヤーウォーター・リヴァイアール（CCR）は「フル・ストップ・ザ・レイン（雨が降るのをとめるのは誰）」と歌い続けていた。ジョン・バエズは「ハード・レイン・ゴナ・フォール（激しい雨が降り続く）」と歌っていた。「あの時代」は象徴的にいえばいつも雨が降っていた。バリケードのなかには水びたしだった。時代が少しもやさしくなかったからこそ逆に「やさしさ」が求められた。そして「やさしさ」は現実に表現されたときにはヘルメットとゲバ棒という荒々しい形をとるほかなかった。なぜなら「やさしさ」は遠くにある理念であり、それは現実のなかにはなかったのだから。現実のなかでは暴力であるものが理念のなかでは非暴力になる、逆に、現実には非暴力であるものが理念のなかでは暴力になる。そこに「やさしさ」のパラドックスがあった。「私たち」は、ヘルメットとゲバ棒の「暴力学生」のなかに真の「やさしさ」を見ていたのであり、「暴力反対」の常識をかかげる「一般学生」や大学当局、あるいはマスコミや世論のなかにこそ暴力を見ていたのである。あの当時、さまざまなバリケードのなかのタテカンでひんぱんに見かけた言葉、サルトルとフランク・ファノンの次のようなメッセージはこの「やさしさ」のパラドックスを語っていたのではないだろうか。

「『非暴力』の君へ！

要するに次のことを理解してくれたまえ——もし暴力が今夜はじめて開始されたもので、かつ

て地上には搾取も圧制も存在しなかったというならば、あるいは非暴力の看板をにかけて紛争を鎮めることができるかもしれない。ところが、もし体制全体が、そして君たちの非暴力思想までが一千年にわたる圧制によつて規定されているならば、受身の態度は君らを圧制者の側につけるだけである」

さまざまなシーンが思い出される。三里塚での機動隊と学生たちの衝突、新宿騒乱の日の夜中まで若者たちがあふれていた大通り、「明日に向つて撃て！」とヘルメットに書いて佐藤訪米阻止のデモに参加した高校生たち、白山通りを埋めつくした日大全共闘のデモ、テレビ画面のなかのベトナム戦争、潜行先からあらわれ日比谷公園の集会で演説する山本義隆。

無数のシーンが断片的に思い出される。シーンはいつか記号に変換されていく。「10・8」（六七年十月八日、佐藤訪ベトナム阻止羽田闘争 京大生山崎博昭死去）、「10・21」（六八年十月二十一日、国際反戦デー、新宿騒乱の日）、「18・19」（六九年一月十八日、十九日、東大安田講堂事件）、「4・28」（六九年四月二十八日、沖縄反戦デー）、「11・16」（六九年十一月十六日、佐藤訪米阻止闘争）、「3・31」（七〇年三月三十一日、赤軍派による「よど号」ハイジャック事件）、「2・22」（七一年二月二十二日、三里塚強制代執行）……。

「10・8」「10・21」「18・19」。ジュツパチ、ジュツテンニイイチ、イチハチイチキユウ。「地の

「靈」という言葉があるが時間にも「時の靈」があるのかもしれない。「10・8」とか「10・21」は私たちの世代にとってはちようどかつての「8・15」や「6・15」のように「時の靈」がたちあらわれる特別の日になっていて、その記号を見るだけでさまざまなシーンが思い出されてくる。たとえば「18・19」、一九六九年一月十八日、東大安田講堂事件の日、私は東大構内にいた。といつても全共闘の学生たちがたてこもった安田講堂のなかではなかった。私は彼らとともにあったのではなく見る側にまわってしまっていた。安田講堂の向かいにあって学生たちと構内に導入された機動隊との「攻防戦」を遠望することのできる法学部の建物の屋上にいた。そこから私は何人かの先輩記者にまじって報道腕章という「安全地帯へのパスポート」をつけて安田講堂と向かいあっていた。一月の寒い朝で、空気が痛かった。誰も何も喋らず、重苦しく黙ったまま安田講堂を見ていた。ジャーナリストの「見る立場」という客観性についていやでも考えずにはいられなかった。

前年の夏に私は朝日新聞社の入社試験に受かった。私はいわゆる就職浪人だったので夏に就職が決まるとすぐ、翌年四月を待たずに朝日新聞出版局校閲部にアルバイトという形で勤め始めていた。「週刊朝日」や「朝日ジャーナル」の校閲の仕事だった。この期間に出版局の先輩記者たちと親しくなった。六八年の夏から秋にかけて東大、日大では全共闘運動が急激に盛り上がっていった。それは信じられないくらいなスピードだった。それまで何か行動したいのだが行動を起